

# 令和3年度 介護予防に資する指導者養成研修会 自立支援を進める栄養管理の実際

実施日：令和4年1月29日（土）

会場：エル・おおさか南館 5階南ホール

## 1. 講演「自立支援に向けた栄養状態改善のサービスについて」

講師：多摩大学医療・介護ソリューション研究所副所長 多摩大学大学院客員教授 石井 富美 先生

石井先生が冒頭示された、日本人口の歴史的推移のグラフに驚愕した。1872年からジェットコースターのように急増し、2010年で最多となった日本人口は、それ以上の勢いで激減し始めており、2040年には、高齢者人口の伸びが落ち着くと同時に、現役世代（担い手）も激減する。この未経験の激動を乗り切るべく、総就業者の増加、より少ない人手でも回る医療・福祉の現場の実現が必要になった。具体的対策としては、多様な就労・社会参加の環境整備、医療・福祉サービスの改革による生産性の向上、給付と負担の見直し等による社会保障の持続可能性の確保と共に、私たち栄養士が特に貢献すべき、健康寿命の延伸が挙げられている。対策を講じる上で知っておくべき、リーン・ヘルスケアという考え方を学んだ。MITのリーン生産方式の医療分野への応用で、無駄を省き、工程を改善し、トータルコストを抑える方式のこと。よりよい医療をより安く享受できるよう、患者にとつての価値に基づく医療の質向上や効率化を促進し、地域主体でその特性に応じて保健医療を再編することが必要とされている。最近の診療報酬、介護報酬改定はこの方式がベースとなっている。今回の介護報酬改定は“自立支援”をキーワードとし、国民がどんな状態であっても専門職による「栄養ケア」が受けられるように策定されている。今後、栄養士は、食事を作るだけ等の家事手伝いの様なサービスではなく、その方が自立して生活していくために必要なサービスを実施していく必要があると強調しておられた。

## 2. 報告「府内市町村における課題解決のためのサービスの実際」

講師：(1)ひらかた栄養ケアチーム「萌」 吉山 美和 氏

枚方市介護予防・生活支援事業における栄養士派遣指導事業についてご報告いただいた。「萌」はこの事業の計画段階から参加された。対象者は、要支援1、2の方たちの中から低栄養リスクがある方を地域包括支援センターのケアマネジャーが抽出し、枚方市を通じて派遣依頼がある。訪問は2か月に3回行う。派遣依頼時に渡される資料内容、訪問時に持参する物の紹介があった。対象者に渡す資料は、必ずピンク等の目立つ色のファイルに入れて渡すことで、対象者に指導内容を意識しやすくしたり、持参する食品サンプルは通常の半分量の方が、改善しやすいイメージを持っていただける等、きめ細かい配慮が大切であることを教わった。この事業の効果についての調査結果を示された。体重変化は増加、減少共に66.7%が目標達成された。食事構成別改善率、摂取量ともに副菜以外は50%以上改善した。2か月では副

菜の改善までは困難だったよう。世帯構成別の分析もされており、単身世帯の方が食材の無駄は多くなるが、対象者自身への指導になるので、改善しやすい傾向があった。指導で使用する教材も紹介いただき、電子レンジの使い方や食品の保存方法等の基本的なことこそが、自立支援になることを教えていただいた。

講師：(2)特定非営利活動法人 はみんぐ南河内 認定栄養ケア・ステーションからふる 杉村 亜希子 氏

NPO法人はみんぐ南河内は、人が生まれて亡くなるまでのあらゆる段階での栄養支援事業を展開されている。その中のいくつかを紹介いただいた。厚生労働省老健局長優秀賞を受賞した藤井寺市いきいき笑顔応援プロジェクトは、藤井寺市から訪問依頼され、対象者の意思確認、目標設定、実施項目の検討、合意形成を経て、本人の状態と行動変容、ステージに応じた栄養支援を行うもので、具体的事例から、実際の業務を知ることができた。他、自身の栄養課題に気づき、セルフケアの方法をみつけていただく介護予防教室、地域の健康支援体制の充実を実現する場として開催されるオナカマ食堂についてもご紹介いただいた。さらに今後の取り組みとして、外来栄養食事指導、居宅療養管理指導、在宅患者訪問栄養指導、様々な困難、不便を感じる方に食材を無料で提供し、支え合う活動として、フードパントリーを実施していくとのこと。これから栄養士が活躍できる業務の幅広さ、栄養支援の重要性を再確認できた。

## 3. グループワーク「自立支援を進める栄養管理の実際」

ひらかた栄養ケアチーム「萌」が実際に栄養士派遣指導事業で依頼された内容を出題いただき、グループ内で進行、書記を決め、低栄養リスクの判定、解決すべき課題の抽出、長期目標、短期目標、具体的な指導（実施）内容について検討を行った。同じグループ内にはフリー、行政、病院、福祉施設等様々な職域の方がおられた。意外だったのは、職域が違うからか、低栄養リスクの判定から考え方が異なったことだった。下痢の原因も実は食品の保管が不適切だったのではないかと、その意見が上がるなど、活発に意見交換し、各グループでの検討内容について発表した。様々な意見を聞くことができ、自分の知識の幅が広がった。最後に実際の指導内容と経過をお伺いし、正確な摂取栄養量を2回目訪問時に示すと効果的であることや、対象者を多面的に分析し、具体的な指導を行う重要性について学んだ。

石井先生からは講評として、実際は、対象者の問題解決には、足りない情報がたくさんあることが多いため、自分が知りたい情報をどうやって聞き出すかが重要。そのためには、仮説を立てて質問し、「なぜそうなりたいたのか」を聞き出す力が、栄養食事指導にも必要であるとのことだった。

(文責 福祉 阿部茉莉)